

戦後70年を迎えた熊谷

平成27年は、「平成の大合併」によって新しい「熊谷市」が誕生して10周年の節目の年です。この合併によって熊谷市は、東北の中心都市としてさらなる発展を遂げていますが、その背景にはこの地域が持つ古代からの豊かな歴史と文化があり、そして現代では「熊谷空襲からの復興」という大きな課題に立ち向かい、それを克服した人々の尽力があったからである、ということをお忘れてはなりません。

～熊谷空襲～

終戦前夜の昭和20年8月14日の夜11時30分ごろ、グアム島の米軍基地から飛来したB29爆撃機約80機が熊谷市の中心市街地に約8000発の焼夷弾を落としました。「熊谷空襲」と呼ばれる出来事です。

この空襲により、中心市街地の約3分の2を焼失し、市役所や公会堂、熊谷西国民学校などの主な建物が焼け、市街地周辺も含めて266人の尊い命が失われました。中心市街地を流れる星川には、炎の熱を避けるため多くの市民が集まりましたが、焼けて倒れた家屋の下敷きになったり、炎によって酸素がうすくなってしまった星川で多くの方が亡くなったそうです。

戦後、熊谷空襲を行ったB29の機長と交流を持った、当時鎌倉町に住んでいた新井賢二郎氏のメモによると、B29のパイロットたちは、すでにニューヨークでは勝利のお祭り騒ぎが行われていることを聞き、「UTAH」という反転帰投・作戦中止の暗号がいつ発せられるかを緊張して聞きながら出撃したそうですが、ついに発せられることなく、空襲を行ったことがわかっています。

“戦争”という大きな渦の中で熊谷市は、一夜にして埼玉県下最大の被害を受け、その後の復興を余儀なくされたのです。



「近藤油屋魚市場」(熊谷空襲後のかたづけの様子) 佐藤虹二氏撮影

～復興へ向けて・区画整理事業～

8月15日正午、ラジオから「終戦の詔勅」が放送されました。しかし、熊谷では悪夢のような一夜があげたばかり、平穏無事な昨日までの風景とは違って、一面廃墟と化した焼け野原の中での終戦でした。悲嘆にくれている暇もなく市民は未だくすぶる焼跡のなかで、犠牲者の処理、後片付けなどの活動を始めました。

焼失した市役所は陣屋町の旧町役場の木造建築に移り、9月上旬には臨時復興課を設けて、罹災者の救助、焼跡の整理等の活動を始めました。また、応急救護所を桜雲女学校に設け、負傷者の治療にも当たりました。罹災者には、8月15日より「空襲罹災者証明書」「罹災者証票」など各種の証明書が交付されました。

ポツダム宣言受諾決定後に行われた「熊谷空襲」は、太平洋戦争最後の本土への空襲として、また埼玉県下では最大の空襲でしたので、結果として多くの公共施設が焼失しました。熊谷市制を記念して建てられた公会堂と市役所も焼けてしまいましたので、昭和23年9月15日に西国民学校(消失)の跡地に新築移転し、その後昭和48年の市制40周年事業として現庁舎が建設さ



焼失した市役所と公会堂



中山道の拡張工事



北大通りの整備

れるまで使用されました。

しかし“復興へ6万市民の総がかり”をスローガンに、空襲の災禍から整然とした近代的な都市として再生すべく、市民はたくましく立ち上がり、いろいろな困難な条件の中で戦後復興は年ごとに進められていきました。

昭和20年12月25日には、熊谷市復興後援会が松本眞平氏を会長に発足し、また同21年6月には埼玉県熊谷市戦災復興土地区画整理事務所が設置され、(1)中山道の整備(2)星川通り線の整備(3)市役所通りの貫通整備(4)北大通り・桜町通り線の整備の「四大目標」を掲げた熊谷市戦災復興計画が策定されて、年度ごとの事業内容によって、難題な事業が進められ、復旧の一途を辿ってきました。

～戦災者慰霊の女神像～

昭和20年8月14日の夜、空襲を受け、一面炎と化した街のなか、人々は水を求めて先を争い、星川へ逃げ込みました。しかし安堵の地と思われた星川も、雨のように落ちてくる焼夷弾や、両側から焼け崩れる家の下敷、あるいは人々に押しつぶされ、一夜にして、大勢の人々の命が奪われてしまいました。

戦後30周年を迎えるにあたり、星川保勝会は遺族会と一体となって、最も多くの犠牲者を出した地である星川上に、平和の願いを込めて慰霊像を建立することを計画しました。

昭和50年8月16日、日本彫刻界の第一人者で人間国宝でもある北村西望氏により、高純度アルミニウム製、銀色の輝く高さ約1.7mの女神像が作られました。「戦災者慰霊の女神」と名づけられたその像の前には、毎年8月16日になると祭壇が設けられ、多くの方が戦災者の供養に訪れ、そしてその日の星川は「灯籠流し」の灯籠で彩られ、夜遅くまで戦災者の霊を慰めています。平和への祈りを込めながら。



戦災者慰霊の女神像

～とうろう流し～



とうろう流し

街の中心部を流れる星川は、戦災犠牲者の最も多かった所で、終戦直後の様子は悲惨の極みでした。戦後の昭和25年8月16日、熊谷仏教会と星川保勝会は犠牲になった人々の霊を慰めるために、星川でとうろう流しを行いました。現在も戦争の悲惨さを忘れないために、毎年8月16日に行われており、夜遅くまで、いつまでもろうそくの灯火が絶え間なく星川を照らしています。

協力：熊谷市立熊谷図書館 写真提供：熊谷市

監修：熊谷市立江南文化財センター 山下祐樹
くましの興況 ディスクロージャー 2016